

# 親密さの違いによるソーシャルメディア上の対人関係の欲求 及び行動の傾向

石川 真\*

(平成27年8月31日受付；平成27年10月26日受理)

## 要 旨

本研究では、ソーシャルメディア上のコミュニケーションにおける対人関係の欲求や行動に親密さの違いがどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。とりわけ、1対1でのコミュニケーションに限定し、親密さの変容の側面に着目しながら、欲求及び行動の関連性や傾向を探った。対人関係の欲求は5因子、対人関係の行動は4因子抽出された。ソーシャルメディア上の対人関係の欲求においては、親密化過程の段階が回避・保身欲求と関連があり、親しさの程度が高い者の方が欲求の低い傾向を示した。理想とする親密さは親和欲求、承認欲求、同調欲求と関連が見られた。一方、ソーシャルメディア上の対人関係の行動は、親密化過程の段階が慎重的行動と関連があり、親しさの程度が高い者の方がこの行動が少ない傾向を示した。親密さの変容の側面は積極的連係行動と関連があり、より親密になった変容の大きい者の方がこの行動が少ない傾向を示した。さらに、今回の知見が情報モラルの指導において有用であることが考察された。

## KEY WORDS

親密さ intimacy      ソーシャルメディア social media      コミュニケーション communication  
情報モラル教育 information moral education      対人関係 interpersonal relationship

## 1. はじめに

内閣府（2015）の青少年のインターネット利用環境実態調査によると、情報モラルを指導する上で注目すべき以下の3点の結果が確認できる。

- (1) 小学生は11.7%，中学生は37.3%，高校生は89.1%が「スマートフォン」でインターネットを利用している。
- (2) スマートフォンで利用しているネットサービスでは、メールやソーシャルメディアなどのコミュニケーションに関わるサービスを小学生は49.0%，中学生は85.5%，高校生は92.8%利用している。
- (3) インターネット上の経験においては、小学生、中学生、高校生の総計2615名のうち、「悪口やいやがらせのメッセージやメールを送られたり、書き込みをされたことがある」者が3.8%、「悪口やいやがらせのメッセージやメールを送ったり、書き込みをしたことがある」者が1.1%、「インターネットで知り合った異性と会ったことがある」者が1.1%だった。

個人で所有するスマートフォンは自由度が高く、さまざまなネット上のサービス利用がより容易になると考えられる。それに伴い、犯罪やトラブルに巻き込まれる可能性も高まると考えられる。実際、被害経験のある者は、上述の調査対象においても、数十人～100人程度に上っている。1学級に1～2名がネットいじめ（cyber bullying）や、ネット上のトラブルの被害に遭うような事態は避けなければならないだろう。このような現状はこれまでも問題視されており、その結果、平成20年3月の小・中学校学習指導要領改訂（高等学校の学習指導要領改訂は平成21年3月）に伴い、児童生徒に情報モラルを身につける指導が示された。また、平成20年2月には子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議でとりまとめられた『「ネット上のいじめ問題」に対する喫緊の提案』リーフレットが公開され、さらに、『「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集』が公表された（文部科学省，2008a）。学校現場はこうした問題に適切に対応することが求められている。

ところで、石川（2015）はソーシャルメディア上の振る舞いの傾向を知ることや社会的スキル育成に目を向けることが情報モラルを指導していく上で有用であると主張している。また、文部科学省（2008b）小学校学習指導要領解説総則編においても、『子どものインターネットの使い方の変化に伴い、学校や教師はその実態や影響に係る最新の情報の入手に努め、それに基づいた適切な指導に配慮することが重要』と指摘されている。ソーシャルメディア上で

\*学校教育学系

のコミュニケーションはもはや日常的な対人関係場面である。したがって、これからの社会における生きる力には、ソーシャルメディア上での対人関係の構築や維持が円滑に行われることが求められると考えられる。

ここでは、対人関係の構築や維持において、「親密さ」という観点からその事象を捉えることとする。たとえば Levinger (1980) は、対人関係の親密さの過程を段階に分類してそれぞれの特徴を示したが、親密化過程には、対人関係の形成の初期段階、より親密になろうとする段階、親密状態を維持しようとする段階、親密状態が崩壊する段階などの過程が挙げられる。また下斗米 (2000) は、対人関係の親密化過程の役割行動の期待や実行動、葛藤事態についてその傾向を探っている。その結果、親密化の各段階の期待度は、自律性、類似性、支援性などの複数の役割行動因子で必ずしも一律の傾向ではなく、役割行動因子の違いによって、親密化の各段階の葛藤事態の生じやすさに異なる傾向があることを示した。

一方、対人関係の形成、構築、維持のための表出される行動の要因として、対人的な欲求に着目することはソーシャルメディア上の行動の傾向を探る上で非常に重要な視点と考えられる。たとえば小林 (2007) は、ケータイの電源をオフにしない傾向やメールを即時応答 (送信) する傾向の実態を「つながっていたい」という心情の現れと解釈している。これは、他者との関わりにおける欲求、たとえば依存的な欲求と捉えることができると考えられる。

これまでに、石川・平田 (2012)、石川 (2013) は親密さの違いによるメールコミュニケーション行動について、親密度が低い相手の方が高い相手よりも「つながっていたい」傾向が概ね強い特徴であることを明らかとした。ただし、親密さの変容過程や欲求の側面については十分な検討がなされていない。

そこで本研究では、親密さの違いがソーシャルメディア上のコミュニケーションにおける対人関係の欲求や行動にどのような影響を及ぼすかを明らかとすることを目的とする。とりわけ、1対1でのコミュニケーションに限定し、親密さの変容の側面に着目しながら、欲求及び行動の関連性や傾向を探る。さらに、本研究の知見が情報モラル教育においてどのような点において有用であるか考察する。

## 2. 方法

### 2.1 質問紙

質問紙は以下の3つの内容群で構成した。(2)(3)の各項目作成にあたっては、石川 (2015) で用いられたソーシャルメディア利用時における相手 (他者) との関わり方についての質問項目や荻野・斎藤 (1995) の心理的欲求に関する質問項目等を参考にした。質問紙には、「ソーシャルメディア」という表現の代わりに、「ネット上のコミュニケーションサービス」と表記した。

- (1) 社会的スキル測定の尺度 (18項目/菊池, 1988)
- (2) 1対1によるテキストメッセージのやり取りに関する内容
  - (a) 相手の属性、親密さの程度、満足度および利用サービスの名称 (計6項目)
  - (b) メッセージのやり取りにおける対人関係の欲求に関する認知 (16項目/項目内容は表1参照)
  - (c) メッセージのやり取りにおける対人関係の行動 (14項目/項目内容は表2参照)
- (3) グループ (3名以上) によるテキストメッセージのやり取りに関する内容
  - (a) 相手の属性、親密さの程度、満足度および利用サービスの名称 (計6項目)
  - (b) メッセージのやり取りにおける対人関係の欲求に関する認知 (20項目)
  - (c) メッセージのやり取りにおける対人関係の行動 (16項目)
  - (d) グループ (3名以上) によるテキストメッセージのやり取りのない者を対象とした項目

今回は、(2)(a)満足度を除く相手の属性 (性別、多肢選択法による9カテゴリーの相手のタイプ)、親密さの項目 (親しさの程度: 非常に親しい~全く親しくないの5件法, 1ヶ月前と比較した親しさの程度の変化: 非常に親しくなった~かなり疎遠になったの5件法, 今後期待する親しさの程度: 今よりも親しくなる, 現状の親しさを維持, 今より疎遠になるの3件法) の5項目, (b) 5件法による16項目, (c) 5件法による14項目を分析対象とした。

### 2.2 対象者・実施時期と方法

情報教育関連の講義科目の受講者である学部生、大学院生159名 (男90名, 女69名/18~25歳) を対象とし、無記名による質問紙調査を授業時間内に実施した。はじめに、性別および年齢について同意しない場合は、無回答であっても構わないこと、および、記入された回答は統計処理を行い、回答用紙は適切に管理・処理する旨を説明した。

### 3. 結果および考察

#### 3.1 ソーシャルメディア上の対人関係の欲求と行動の傾向

メッセージのやり取りにおける対人関係の欲求に関する16項目の信頼性係数（クロンバックの  $\alpha$  係数）は  $\alpha = .93$  だった。メッセージのやり取りにおける対人関係の行動に関する14項目の信頼性係数（クロンバックの  $\alpha$  係数）は  $\alpha = .80$  だった。いずれも  $\alpha = .80$  以上であることから、信頼性の高い尺度であると考えられる。

今回の対人関係の欲求の下位概念を明らかとするために、16項目による因子分析（主因子法、平行分析の結果に基づき5因子を抽出、バリマックス回転、因子得点の推定）を行った結果（表1）、第V因子までの累積寄与率は65.65%だった。各因子の負荷量が高い項目内容を参考とし、第I因子は親和欲求、第II因子は回避・保身欲求、第III因子は承認欲求、第IV因子は依存欲求、第V因子は同調欲求と命名した。

表1 メッセージのやり取りにおける対人関係の欲求の因子構造

項目	I	II	III	IV	V	共通性
2 相手に信頼してもらいたい	.80	.15	.18	.11	.28	.78
1 相手と関わりを深めたい	.77	.13	.24	.17	.25	.76
11 相手のことを大切にしたい	.63	.19	.18	.19	.09	.51
16 相手から好かれたい	.59	.44	.39	.20	.18	.76
5 相手に軽蔑（けいべつ）されたくない	.48	.68	.11	.15	.11	.74
15 恥をかきたくない	.05	.58	.12	.00	.21	.40
10 相手に悪口を言われたくない	.47	.53	.36	.18	.04	.66
7 自分のことを良く評価してほしい	.22	.49	.30	.25	.33	.55
12 自分の意見を受け入れてほしい	.21	.22	.69	.12	.43	.78
9 困ったときは相手に頼りたい	.33	.15	.57	.20	.04	.49
4 失敗したときは相手に励ましてほしい	.48	.23	.50	.21	.11	.58
6 頻繁（ひんばん）にメッセージのやり取りがしたい	.19	.05	.09	.83	.25	.79
14 用事がなくても、メッセージのやり取りにつきあってもらいたい	.16	.13	.23	.73	.10	.63
3 相手と同じような意見でいたい	.34	.23	.14	.36	.59	.66
8 相手の意見に同意したい	.37	.36	.13	.29	.57	.68
13 自分の意見に同意してほしい	.15	.37	.45	.17	.54	.68
因子寄与	3.20	2.05	1.87	1.80	1.58	

つづいて、対人関係の行動の下位概念を明らかとするために、14項目による因子分析（主因子法、平行分析の結果に基づき4因子を抽出、バリマックス回転、因子得点の推定）を行った結果（表2）、第IV因子までの累積寄与率は47.46%だった。各因子の負荷量が高い項目内容を参考とし、第I因子は慎重的行動、第II因子は積極的連係行動、第III因子は依存的行動、第IV因子は誠實的行動と命名した。

今回の因子分析の結果より、ソーシャルメディア上の対人関係の欲求と行動の間においては、必ずしも1対1で対応する因子が抽出されていない。そこで、各因子間の相関係数および無相関検定を行い、欲求と行動の因子の関連性について分析し（表3）、欲求の各因子がどのような行動の因子と関連が高い傾向にあるか検証することとした。

親和欲求は、3種類の行動と正の相関があることが示された。しかし、相関係数は全般的に低かった。回避・保身欲求については、慎重的行動のみが有意であり、中程度の相関が見られた。承認欲求では、3種類の行動と関連があり、このうち依存的行動が最も相関が高かったものの、相関係数は低い値だった。依存欲求では2種類の行動と関連があり、このうち、積極的連係行動と中程度の相関が見られた。同調欲求は3種類の行動と有意であったが、いずれも低い相関が示された。親和、承認、同調の各欲求は、比較的多様な行動因子が表出するのに対し、回避・保身欲求は恥をかかないように注意してメッセージを送るなど、その欲求が直接的に表出される慎重的行動のみと相関の傾向を示した。また、依存欲求においても、積極的連係行動にはメッセージを頻繁に送るなど、ある種の相手への依存的行動も含まれることから、特定の行動と相関が高い欲求と考えられる。行動の側面から検証すると、誠實的行動は親和欲求のみと関連が高く、他の行動は複数の欲求と関連が見られた。

表2 メッセージのやり取りにおける対人関係の行動の因子構造

項目	I	II	III	IV	共通性
14 恥をかかないように注意してメッセージを送る	.83	.09	-.01	.14	.72
5 変な人だと思われないように注意してメッセージを送る	.81	.00	.12	.17	.70
2 慎重（しんちょう）に言葉を選んでメッセージを送る	.55	.04	-.05	.35	.43
3 自分の正直な気持ちを抑えて、相手に同意するメッセージを返信する	.55	-.01	.40	.02	.46
1 相手にメッセージを頻繁（ひんばん）に送る	.06	.93	.20	.01	.91
8 用事がなくても、メッセージを送る	-.05	.65	.18	.08	.46
6 相手からメッセージを頻繁（ひんばん）に受け取る	.03	.54	.12	.02	.31
10 メッセージを受け取ったら、すぐに返信する	.23	.33	.30	.08	.26
4 相手に頼る内容のメッセージを送る	.22	.16	.65	-.06	.50
12 相手から自分の意見に同意するメッセージを受け取る	-.04	.20	.57	.22	.41
9 相手のメッセージ内容は前向きに解釈（悪く解釈しないように）する	-.08	.16	.42	.25	.27
13 相手からアドバイスを受けることが多い	.11	.26	.37	.10	.23
11 相手が誤解しないように、わかりやすい表現でメッセージを送る	.29	-.03	.10	.62	.48
7 相手のメッセージ内容に、まじめに返信する	.21	.17	.27	.60	.50
因子寄与	2.21	1.89	1.50	1.05	

表3 メッセージのやり取りにおける欲求とそれに伴う行動の関連

	親和欲求	回避・保身欲求	承認欲求	依存欲求	同調欲求
慎重的行動	<i>n.s.</i>	.50**	.18*	<i>n.s.</i>	.24**
積極的連係行動	.19*	<i>n.s.</i>	.22**	.61**	.17*
依存的行動	.17*	<i>n.s.</i>	.29**	.23**	.25**
誠実的行動	.20**	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>

\*\* :  $p < .01$  \* :  $p < .05$  *n.s.* :  $p > .10$

ところで、各因子から抽出される因子得点は、標準得点のため実データから得られる規準が示されず、実際の欲求や行動の度合いや程度が明らかとはならない。そこで、各因子の負荷量の高い項目の素点に基づく平均値を指標として因子間の比較を検討することとした。各因子の負荷量が.50以上に該当する項目の平均値を当該因子の指標とした。なお、メッセージのやり取りにおける対人関係の欲求については、因子得点と項目平均の各相関係数は、第1因子.88、第2因子.85、第3因子.85、第4因子.94、第5因子.81だった。メッセージのやり取りにおける対人関係の行動については、第1因子.96、第2因子.91、第3因子.93、第4因子.92だった。いずれも高い相関関係を示しているものの完全に一致しているわけではないため、今回の指標は、おおむね同種の欲求因子、行動因子の傾向と捉える必要があると考えられる。

メッセージのやり取りにおける対人関係の欲求について、項目の平均値を従属変数とし、5種類の欲求因子を独立変数として一要因分散分析を行ったところ、有意であった ( $F(4,604)=112.55, p < .01, \eta^2=.21$ ) (図1)。そこで、Holm法による多重比較を行った結果、回避・保身欲求、承認欲求間以外で有意差が見られた ( $p < .01$ )。今回の指標は5件法（1～5）に基づく平均であることを踏まえると、親和欲求は非常に高い欲求水準を示し、他の4種類の欲求よりも有意に高かった ( $p < .01$ )。回避・保身欲求、承認欲求はやや高い欲求水準の傾向を示し、依存欲求、同調欲求よりも有意に高かった ( $p < .01$ )。依存欲求、同調欲求は、他の欲求に比べると有意に低かった ( $p < .01$ ) の、欲求水準としては中庸と考えられる。

メッセージのやり取りにおける対人関係の行動について、項目の平均値を従属変数とし、4種類の行動因子を独立変数として一要因分散分析を行ったところ、有意であった ( $F(3,453)=39.76, p < .01, \eta^2=.13$ ) (図2)。そこで、Holm法による多重比較を行った結果、慎重的行動、積極的連係行動間および慎重的行動、依存的行動間以外で有意差が見られた ( $p < .01$ )。誠実的行動は他の行動よりも有意に多い傾向が示された ( $p < .01$ )。ただし、際立って多い行動ではないと考えられる。依存的行動は積極的連係行動よりも有意に多い傾向が示された ( $p < .01$ )。ただし、依存的行動、積極的接触行動、慎重的行動は3前後の値を示しており、中庸程度の行動の傾向を示していると考えられる。

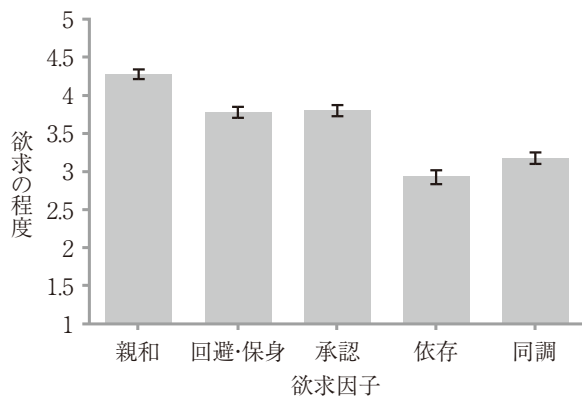


図1 メッセージのやり取りの各欲求因子の比較  
エラーバーは標準誤差を示す

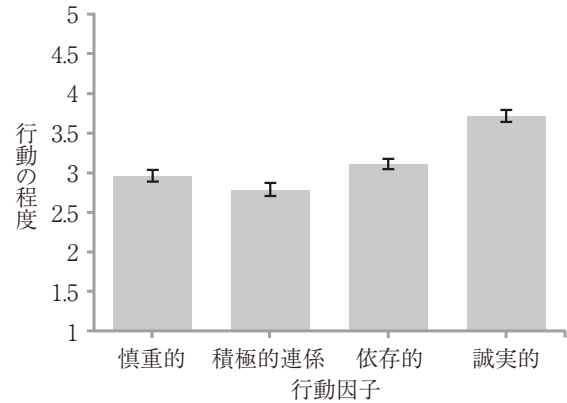


図2 メッセージのやり取りの各行動因子の比較  
エラーバーは標準誤差を示す

### 3. 2 親密さの違いが及ぼすソーシャルメディア上の対人関係の各欲求の傾向

性別、相手のタイプ、親しさの程度、親しさの程度の変化、今後期待する親しさの程度を独立変数、各欲求の平均値を従属変数として変数増減法による重回帰分析を行った。なお、相手の属性の項目の9カテゴリーの相手のタイプのうち、該当者数が全体の5%未満の少数タイプはあらかじめ除外した。その結果、今回は相手のタイプは友人と恋人の2カテゴリーが分析対象となった。親しさの程度は、親しくないに該当する評定には回答がなく、親しさの程度の変化、今後の期待する親しさの程度においても、疎遠になるような評定に回答はなかった。あらかじめ独立変数の性別および相手のタイプは名義尺度のためダミー変数で処理した。性別は男を1、女を0としてダミー変数とした。したがって、標準偏回帰係数が正の場合、男性との影響が強い傾向を示し、負の場合は女性の影響が強い傾向を意味する。今回対象とした独立変数間は最大でVIF=1.88であり、多重共線性の可能性は低いと判断した。

重回帰分析の結果、表4の通り欲求の因子ごとに有意となるモデルが抽出された。独立変数の一部に有意な傾向を示さなかったものもあるが、いずれの因子においても親密さに関わる変数において関連性が見られた。

親和欲求は、性別と今後期待する親しさの程度の2変数のモデルが抽出された。男性に比べ女性は有意に高い傾向を示した。今後期待する親しさの程度においては、より親しくになりたい者において親和欲求が高い傾向が示された。親和欲求は良好な対人関係を構築、維持するためには非常に重要な欲求である。したがって、今後も親密になることを望んでいる者が、親和欲求が高いということは極めて妥当な結果が示されたと解釈できる。

回避・保身欲求は、親しさの程度のみの変数のモデルが抽出された。現時点の親しさの程度が高い者の方がそれほど高くはない者よりも有意に欲求が低かった。この欲求は恥をかきたくない、軽蔑されたくないなどのネガティブな心理的要素が含まれる。非常に親しい関係の場合、ネガティブな要素も含めてある程度の対人関係が維持されており、あまり強い欲求として表出しない可能性が考えられる。

承認欲求は、性別と今後期待する親しさの程度の2変数のモデルが抽出された。男性に比べ女性が有意に高い傾向を示した。今後期待する親しさの程度においては、より親しくになりたい者の方が現状の親しさを維持したい者よりも承認欲求が有意に高い傾向が示された。現状の親しさを維持したい者は、相手から承認されるような対人関係の状態になっており、それほどこの欲求水準が高くない一方で、親密になることを望んでいる者は、まだ相手に十分受け入れられていない状態のため、この欲求水準が高い傾向を示した捉えることができる。

依存欲求は、相手のタイプ（恋人）と親しさの程度の変化の2変数のモデルが抽出された。相手が恋人である場合にそうではない者と比べて有意に高い傾向を示した。一方、親しさの程度の変化においては、非常に親しくなった者ほど、依存欲求は低い傾向を示したが、有意ではなかった。石川（2013）はメールのやり取りにおける親密さの低い者の方が高い者よりも頻繁であるという傾向を示した。この行動が依存的な欲求と関連があるとするならば、非常に親しくなった者は相手とある程度の親密な関係を築くことができた状態と捉え、この欲求が抑制されたのに対し、それほど親しくなっていない者は、依然として親密な関係を築けない状態のため、頻繁にメッセージのやり取りがしたいという欲求が高まった可能性が考えられる。

同調欲求は、今後期待する親しさの程度のみの変数のモデルが抽出された。より親しくになりたい者の方が親しさを維持したい者よりも低い有意傾向を示した。今回のこの欲求は、相手と同じような意見でいたかったり、自分の意見を相手に同意してほしいという相手へ同調するだけでなく相手も自分に同調してほしいという要素が含まれているが、対人関係を維持する際にこのような欲求が高い傾向になると考えられる。

表4 親密さの違いが及ぼす対人関係の各欲求の傾向

		標準偏回帰係数( $\beta$ )				
		親和	回避・保身	承認	依存	同調
性別		-.59**		-.29 <sup>†</sup>		
相手の タイプ	友人					
	恋人				.56*	
親しさの程度			-.37*			
親しさの程度の変化					-.13	
今後期待する親しさの程度		.61**		.41*		-.28 <sup>†</sup>
決定係数 ( $R^2$ )		.19	.04	.07	.05	.02
自由度調整済み決定係数		.18	.03	.05	.03	.01
F値		$F(2,145)=17.12^{**}$	$F(1,146)=5.91^*$	$F(2,145)=5.20^{**}$	$F(2,145)=3.42^*$	$F(1,146)=2.94^{\dagger}$

<sup>†</sup>:  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

### 3. 3 親密さの違いが及ぼすソーシャルメディア上の対人関係の各行動の傾向

3.2において対人関係の各欲求の傾向を探るために分析した同様の独立変数と、各行動因子の平均値を従属変数として変数増減法による重回帰分析を行い、有意となるモデルを因子ごとに抽出した。その結果、表5の通りとなった。今回抽出されたモデルのうち、親密さに関わる変数において関連性が見られた因子は、慎重的行動と積極的連係行動の2因子であった。有意ではなかったが、依存的行動においても親密さとの関連性が示された。

慎重的行動は、親しさの程度と今後期待する親しさの程度の2変数のモデルが抽出された。親しさの程度は、現時点の親しさの程度が高い者の方がそれほど高くない者よりも有意に慎重的行動が少ない傾向を示した。一方、今後期待する親しさの程度は、より親しくなりたい者の方が現状の親しさを維持したい者よりも慎重的行動が多い傾向を示したものの、有意ではなかった。慎重的行動は、恥をかかないように注意してメッセージを送る、変な人だと思われるように注意してメッセージを送るなどのネガティブな心理的要素が含まれる行動と捉えることができる。親密さの段階において、非常に親しい者よりも、やや親しい者の方がこの行動が多い傾向を示したが、親密さの高い者は、それほど高くない者よりも、相手と打ち解けた対人関係であると考えられる。したがって、ネガティブな心理的要素も含んでも現在の良好な望ましい対人関係が維持されると捉えている可能性がある。このことは、今後期待する親しさの程度の結果においても同様の捉え方が可能と考えられる。つまり、より親しくなりたい者は現段階では打ち解けた関係の状態に至っていないのに対し、現状の親しさを維持したい者は既に打ち解けた関係のため、慎重的行動の違いが生じている可能性がある。

積極的連係行動は、相手のタイプ(恋人)と親しさの程度、親しさの程度の変化、今後期待する親しさの程度の4変数のモデルが抽出された。相手が恋人である者はそうではない者と比べて有意に積極的連係行動が多い傾向を示した。親しさの程度の変化においては、非常に親しくなった者ほど、積極的連係行動は少ない有意傾向を示した。一方、親しさの程度においては、非常に親しい者の方がそれほど高くない者よりも積極的連係行動が多い傾向を示したものの有意ではなかった。今後期待する親しさの程度においては、より親しくなりたい者が現状の親しさを維持したい者よりも積極的連係行動が多い傾向を示したが有意ではなかった。相手にメッセージを頻繁に送ったり、用事がなくてもメッセージを送るなどがこの行動の特徴であるが、この点を踏まえると、相手が恋人の場合は妥当な結果であると考えられる。メッセージの頻繁なやり取りは、親密さを確認し合うポジティブな要素ばかりではなく、場合によっては過度な行動と受け止められかねず、ネガティブな要素も含まれる行動因子と捉えられる。この点を踏まえると、親しさの程度の変化において、非常に親しくなった者がそれほど親しくなっていない者よりもこの行動が少ない点は、現在の親密な対人関係をネガティブな要素によって崩したくないという心理的な側面が行動の抑制につながった可能性があると考えられる。

依存的行動は、性別と親しさの程度の変化の2変数のモデルが抽出された。男性に比べ女性が有意に多い傾向が示された。親しさの程度の変化においては、非常に親しくなった者ほど、依存的行動が多い傾向が示されたものの有意ではなかった。依存的行動もネガティブな要素が含まれる行動因子と捉えられるが、適度な依存関係であることが良好な対人関係を維持するためには重要と捉えられている可能性がある。

誠實的行動は、相手のタイプ(恋人)のみの1変数のモデルが抽出された。相手が恋人である者はそうでない者と比べて有意に多い傾向を示した。わかりやすい表現でメッセージを送ったり、まじめに返信したりするような行動は、対人関係においては、基本の姿勢であり、親密さの違いや、親密さの変容の違いで大きく異なるような行動ではないと考えられる。

表5 親密さの違いが及ぼす対人関係の各行動の傾向

欲求		標準偏回帰係数( $\beta$ )			
		慎重的	積極的関係	依存的	誠實的
性別				-.36*	
相手の タイプ	友人				
	恋人		.92**		.57*
親しさの程度		-.61**	.23		
親しさの程度の変化			-.16†	.13	
今後期待する親しさの程度		.22	.24		
決定係数		.11	.14	.05	.03
自由度調整済み決定係数		.10	.12	.03	.02
F値		$F(2,147)=9.22^{**}$	$F(4,145)=5.93^{**}$	$F(2,147)=3.68^*$	$F(1,148)=4.76^*$

† :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$ 

### 3. 4 総合的考察

対人関係を進展させたり維持したりする過程においては、当事者の欲求を満たす行動だけではなく、相手の期待に沿った役割行動を実際に遂行できるかどうかが重要であると考えられる。今回は表出される行動の要因を探る上で、下斗米(2000)が示した役割行動の期待という枠組みから、親密さの違いとソーシャルメディア上の対人関係の欲求や行動の関連性について検証していくこととする。

欲求と行動の関連性の傾向として、当事者の各欲求が各行動と一部を除いては非常に低い相関関係であったり、ほとんど相関が見られなかったのは、今回取り上げた欲求と行動に元々関連がなかった可能性がある。逆に関連があるならば、当該の欲求を抑制したり、あるいは欲求がなくても各行動が表出された結果と捉えることができるだろう。後者の場合、期待される役割行動を遂行するために欲求と行動の不均衡が生じていると考えられる。

ところで、本研究で示された3つの親密さの観点は次のように捉えることができると考えられる。「親しさの程度」は、親密化過程における各段階(点)の親密さの程度を示したものと捉えることができる。「親しさの程度の変化」は、明確な親密化過程のどの段階かを示すものではなく、当事者の親密化の変容状態(範囲)に着目した指標である。「今後期待する親しさの程度」は「親しさの程度の変化」と同様に、明確な親密化過程のどの段階かを示すものではなく、変容状態(範囲)の指標である。ただし、「親しさの程度の変化」が現実(実際)の変容の結果であるのに対し、「今後期待する親しさの程度」は望ましい変容、あるいは理想とする変容であり、相手とどのような関係を築いていきたいかという指標と捉えることができる。これら3つの親密さの観点から、各欲求、各行動の傾向を再検証する。

各欲求と親密さの観定の傾向として、「親しさの程度」は5つの欲求因子のうち、回避・保身欲求のみと関連があった。この欲求はネガティブな心理的要素が含まれると解釈されたが、こうした心理的な側面が親密化過程の段階によって抑制あるいは低下したり、逆に高まることで、欲求の水準に違いがある点を明らかにすることができた。今回対象としなかった欲求においても同様の傾向を示す可能性を探っていく必要があるだろう。「親しさの程度の変化」は、依存欲求のみと関連が見られたが、有意ではなかった。抽出されたモデルとしては関連性が示されていることから、今後も注目すべき欲求の一つと考えられる。「今後期待する親しさの程度」は、親和欲求、承認欲求、同調欲求において関連性が見られたが、同調欲求は負の関連があった。相手と相互作用していく過程において、各欲求を抑制したり促進させたりする複雑な心理状況を反映した結果と捉えることができる。親密化過程の「段階」(点)ばかりでなく、変容(範囲)にも焦点を当てることの重要性が示唆された。以上の通り、親密化過程、現実や理想の親密さの各側面において、ソーシャルメディア上の対人関係の欲求との関連性の傾向が示された。

各行動と親密さの観定の傾向として、「親しさの程度」は、慎重的行動、積極的関係行動と関連があった。ただし積極的関係行動は有意ではなかったことから、今後さらにこの行動については検証が必要と考えられる。慎重的行動と親しさの程度には負の関連が示され、親密化過程の段階が進むにつれて行動に抑制が見られた。慎重的行動には、「恥をかかないように注意してメッセージを送る」という項目が含まれるが、より親密な関係になると、打ち解けた関係が築かれ、恥を含むある種の自己開示がされやすくなる結果と捉えることができる。慎重的行動は、親密化の各段階で、自己開示の役割行動の期待が関係している可能性がある。「親しさの程度の変化」は積極的関係行動と有意な関連があった。非常に親しく変容した者の方が積極的関係行動を抑制し、変容が大きい者の行動が多い現象を示した。ネガティブな要素も含まれる行動を抑制することで、適度な距離感を取ることがある種の役割行動の期待と捉えることができ、結果的に相手との親密さを深められると考えられる。「今後期待する親しさの程度」は、慎重的

行動、積極的連係行動の2つの行動と関連があった。現実の役割行動の結果を踏まえ、親密さを深めるためには、それぞれの行動を促進することが期待されていると考えられる。ただし、いずれの行動も有意ではないため、理想とする親密さとの関連性の中で同様の役割行動傾向が期待されているか今後さらに検証していく必要があるだろう。一方、誠実的行動のように親密さと関連のない行動がある点は、どの立場からどのような役割行動が期待されるかということを検証する上で有用な知見と言えるだろう。

ところで、情報モラルの指導にあたって、今回の知見はどのような意義があるだろうか。情報モラルを指導する上では、文部科学省（2008b）小学校学習指導要領解説総則編に示された『子どものインターネットの使い方の変化に伴い、学校や教師はその実態や影響に係る最新の情報の入手に努め、それに基づいた適切な指導に配慮することが重要』という点に目を向ける必要がある。内閣府（2015）の調査をはじめ、利用の実態の概要については最新の情報は得られるものの、より具体的な活動場面の心理的側面については十分な資料が揃っていない。その意味においても、今回の知見は具体的なソーシャルメディア上のメッセージのやり取りの場面の行動や心理的側面の傾向を知る上で有用であると考えられる。さらに、親密さというのは対人関係の構築の段階を知る上で重要な指標である。したがって、どのような対人関係の状態において問題が起りやすいかを知るための一つの情報源と捉えることができるだろう。今回の結果のうち、ソーシャルメディア上の対人関係の行動の傾向を知ることで、利用者自身が自分の行動に気を配ることが可能になれば、トラブルを回避するだけでなく、良好な対人関係を構築、維持しやすくなると考えられる。以上の点より、今回の知見は情報モラルの指導に有用であると考えられる。

#### 4. おわりに

本研究では、ソーシャルメディア上の1対1でのコミュニケーションにおける対人関係の欲求や行動に親密さの違いがどのような影響を及ぼすかその傾向を探った。親密さの違いについては、変容の側面に着目した。対人関係の欲求は親和欲求、回避・保身欲求、承認欲求、依存欲求、同調欲求の5因子が抽出され、対人関係の行動は慎重的行動、積極的連係行動、依存的行動、誠実的行動の4因子が抽出された。欲求と行動のそれぞれと親密さとの関連性については以下の傾向が示された。

- (1) ソーシャルメディア上の対人関係の欲求は、親密化過程の段階や理想とする親密さの変容の側面と関連性が見られた。「親しさの程度」は、回避・保身欲求のみと関連があり、現時点の親しさの程度が高い者の方がそれほど高くない者よりも有意に欲求が低い傾向を示した。「今後期待する親しさの程度」は、親和欲求、承認欲求、同調欲求において関連性が見られた。親和欲求と承認欲求は、親密さと正の関連性が示されたが、同調欲求は親密さと負の関連性が示された。
- (2) ソーシャルメディア上の対人関係の行動は、親密化過程の段階や現実の親密さの変容の側面と関連性が見られた。「親しさの程度」は、慎重的行動のみと負の関連があり、現時点の親しさの程度が高い者の方がそれほど高くない者よりもこの行動が少ない傾向を示した。「親しさの程度の変化」は、積極的連係行動と負の関連があり、非常に親しくなった者の方が、親しさが大きく変化しなかった者よりもこの行動が少ない傾向を示した。

さらに、情報モラルの指導において、今回の知見が有用であることが考察された。

今回の調査においては、親密さの変容の側面にも焦点を当て、その傾向や関連性を示すことができたものの、欲求と行動の関連性、とりわけ因果関係については検討することができなかった。行動に影響しているのは欲求だけでなく、さまざまな要因が考えられるが、その一つが親密さであり、ソーシャルメディア上の対人関係の行動を探る上で親密化過程は重要な因子の一つとなり得るだろう。その一方で、親密化においては、過程、段階についてより明確な基準や分類により検証を深めていく必要があるだろう。石川（2015）は情報モラル指導にあたって、社会的スキルに着目することの重要性を指摘しているが、本研究で対象とした対人関係の欲求は、社会的スキルと関連性が見られることが指摘されている（たとえば、渡部，1999）。こうした知見を踏まえて、今回の研究成果と社会的スキルの関連性についても検討する必要があると考えられる。

今回の1対1という限定的なメッセージのやり取りの場合のみを分析対象としたが、ソーシャルメディア上ではグループでのやり取りが多いだろう。調査ではグループ内での欲求や行動に関する質問項目を用意して実施した。今後これらの結果を分析し、多様な他者が集まる「グループ」という集団でいかに良好な対人関係を構築して、コミュニケーションしているか、その傾向を探っていくことが課題である。



## 文献

- 石川 真 (2013) 親密さの違いによるメールコミュニケーションの振る舞いに関する研究. 上越教育大学研究紀要, 32, 25-34.
- 石川 真 (2015) ネット上のコミュニティへの関与の違いが他者とのつながり方に及ぼす影響. 上越教育大学研究紀要, 34, 13-23.
- 石川 真・平田乃美 (2012) 親密さの違いによるメールの振る舞い方に関する研究. 日本社会心理学会第53回大会発表論文集, 159.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する, 川島書店.
- 小林哲生 (2007) ケータイ使用が生みだす心理 (第3章). モバイル社会の現状と行方 [小林・天野・正高著], NTT出版, 56-93.
- Levinger, G. (1980) Toward the analysis of close relationships. *Journal of experimental social psychology*, 16, 510-544.
- 文部科学省 (2008a) 「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集 (学校・教員向け)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf) (検索日2015年8月21日)
- 文部科学省 (2008b) 情報教育の充実, コンピュータ等や教材・教具の活用 (第5節教育課程実施上の配慮事項 第3章). 小学校学習指導要領解説総則編, 東洋館出版社, 79-82.
- 内閣府 (2015) 青少年調査の結果 (第II部 調査の結果 第1章), 『平成26年度青少年のインターネット利用環境実態調査報告書』, 13-99.  
<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h26/net-jittai/pdf/s2-1-1-1.pdf> (検索日2015年8月21日)  
<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h26/net-jittai/pdf/s2-1-1-2.pdf> (検索日2015年8月21日)
- 荻野七重・斎藤 勇 (1995) 多変量からみた心理発生的欲求の分類と構造. 白梅学園短期大学紀要, 31, 125-141.
- 下斗米淳 (2000) 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究—役割期待と遂行とのズレからの検討: 役割期待と遂行とのズレからの検討. *実験社会心理学研究*, 40(1), 1-15.
- 渡部玲次郎 (1999) 対人関係能力と対人欲求の関係. *心理学研究*, 70(2), 154-159.

## 付記

本研究は, 科研費(基盤研究(C))「青少年のネットワーク環境における社会的なつながりの認識に関する基礎的研究 (課題番号23601004)」の助成を受けて行ったものである。

# The effects of intimacy on motivations and behaviors of interpersonal relationship in social media

Makoto ISHIKAWA \*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the effects of intimacy on motivations and behaviors of interpersonal relationship in social media. Especially, this study was focused on intimate process in communication of dyadic interaction. Five factors were extracted in motivations of interpersonal relationship and four factors were extracted in behaviors. The results on the effects of intimacy process in these factors were as follows:

It was found that, from the result of interpersonal relation motivations in social media, the intimate process was related to avoidance motivation, and aspect of preferred intimate change was related with friendship, approval, and sympathize motivations.

It was shown that, in the relationship of interpersonal relation behaviors in social media, the intimate process was related to careful behavior, and aspect of actual intimate change was related to positive connection behavior.